

監修のことば

近年わが国は、人口の少子高齢化と経済成長の停滞により、グローバル化とともに医療を中心とした社会保障の充実へと社会は大きく転換し、求められる医療も大きく変わってきました。

従来は、病院で疾患を診断して治す急性期の医療が中心でしたが、高齢社会では医療が病院では完結せず、急性期を過ぎた患者を治し支える医療の必要性が高まり、医療とともにリハビリテーションや介護が一体となったサービス提供体制が地域で構築することが重要な課題となりました。

そこでは、医師が中心となるピラミッド型の医療の体制は成り立たず、多職種の医療スタッフが協働でプラットフォームを築いて患者のケアにあたることとなります。このような体制では、医療職全体が相互に患者を中心に、各自の有する専門的な知識や考え、技術を提供して総合的な視点から医療や介護をすすめることが基本となります。

このような、時代と社会のニーズに応じて新しい医療の提供体制を構築するには、従来の専門職としての業務内容の範疇を超えて連携を深めることが必須となります。今日まで、医療職の皆さんは、ご自身の専門性を高めることに注力されていたことと思いますが、これからのより良い医療を患者の方々に提供するためには、それに加えて他領域の専門職の方々と連携を円滑に進めることも求められるところとなります。

それには、医学・医療の中でも、とくに病気や病態生理を共通の視点でとらえることが重要となります。例えば、専門用語や考え方、論理の進め方の相違をまず克服して、知識量を高めることにより、症例を検討するカンファランスなどが正確に、しかも効率的にすすめることが可能となります。

このような時代と社会のニーズに応じて、医療職の方々が、臨床医学を体系的に学ぶとともに、毎日の診療の場で活用される生きた知識を得ることもできる手引書として本書が企画されました。企画された吉澤篤人先生は、国立国際医療研究センターで、長年にわたって研修医や医療職の教育指導にあたってこられたこの領域の第一人者です。執筆にあられた先生方も臨床経験豊富な教育者として実績のある方々ばかりです。

本書が、医療職の方々の座右の書となり、日常診療に活用され、わが国の医療の質向上に資することが出来れば、大変幸甚に存じます。

2016年6月

矢崎 義雄

序

チーム医療の推進には、メディカルスタッフ同士の良好なコミュニケーションが不可欠です。良好なコミュニケーションが形成されるためには、目的と知識が共有されている必要があります。

現在の医療スタッフは勉強熱心で、特定の領域で医師以上に知識がある人も珍しくありません。しかし、専門以外の領域になると言葉の意味が理解できないため、多職種が参加するカンファランスが十分に機能しないこともあります。教育的な多職種カンファランスが行われるのが理想ですが、医療スタッフは職種によって知識量の差が大きいため、容易ではありません。「聞きたいこと」と「教えたいこと」がかみ合わないこともしばしばです。

チーム医療の質を高めるためには、基礎的な知識を共有する必要があります。ところが、さまざまな職種のスタッフが共用できるテキストはほとんどありません。本書は「メディカルスタッフ向けの臨床内科学書を」という野心的な企画で作成したものです。執筆されたのはいずれも「教えながら診療している」優れた医師です。本書を手にとられた方はまず、ご自分の得意分野と不得意分野を読んでみてください。執筆者が「知っておいてほしい」と考えていることや現場の息づかいが感じられるはずです。

チーム医療のキーパーソンである看護師には「特定行為」の議論にみられるように、役割の拡大が求められています。また、病院薬剤師には「病棟服薬指導」が、調剤薬局の薬剤師には「かかりつけ」の機能が求められています。時代のニーズに応えるために看護師は「病態生理」, 「臨床推論」, 「フィジカルアセスメント」を、薬剤師は「疾患」の知識を深める必要があります。

本書は、さまざまな読者の「聞きたいこと」に応えられるように、外来、病棟、疾患、チーム医療の4つの章で構成されています。I章は優れた「外来トリアージナース」を育成する内容を、II章は看護師が医師を呼ぶ際に伝えるべき所見や情報を執筆していただきました。III章は代表的な疾患の知識が整理されています。IV章はチーム医療に参加することになったスタッフに向けた章で、「研修医の先生にもここまでは理解しておいてもらいたい」と思われる内容を盛り込んでいただきました。いずれの章も、医師が読んでも十分勉強になると確信しています。

本書が現場の本棚に置かれ、すべてのメディカルスタッフに共用されるとともに、チーム医療の指導者を養成する教材として利用されることを願っています。

2016年6月

吉澤 篤人